

〈論文〉

「甘え」とは何か

土澤元太・松浦秀太

土澤元太 札幌国際大学大学院心理学研究科

松浦秀太 札幌国際大学人文学部心理学科

What is *Amae*?

Genta Tsuchizawa (Graduate School of Psychology, Sapporo International University)

Shuuta Matsuura (Department of Psychology, Faculty of Humanities, Sapporo International University)

The theory of “*Amae*” was conceived by Doi Takeo, a Japanese psychologist. However, the definition of *amae* is unclear and it is difficult to develop a common base for discussion *amae*. The present study organizes, summarizes, and reexamines the basic information about how Doi used and understood the word *amae* and the process through which he developed the theory of “*Amae*.”

キーワード: 「甘え」 「甘え」理論 土居健郎

Keywords: “*Amae*” “*Amae*” Theory Takeo Doi

I はじめに

土居健郎 (1920-2009) が著した『「甘え」の構造』(弘文堂) が出版されてから 50 年が経った。この著作は累計 200 万部を超える大ベストセラーになり、現在でも版を重ね続けている。一般的には、精神科医であった土居が「甘え」という鍵概念を用いて日本人の心理や行動を考察した日本人論として読まれることが多いようである。土居はその後も「甘え」研究を続け、その成果は精神医学の世界だけではなく、臨床心理学、発達心理学、文化人類学、社会学などの様々な分野に影響を及ぼした。

しかし、「甘え」理論が精神科医であった土居によって着想されたにもかかわらず、その理論が臨床実践でどのように活用できるのかという点については、土居の著作を読んでも明確には理解できない。この背景には「甘え」という概念がそもそも何を意味しているかが曖昧であるという要因が大きいように思われる。このような「甘え」の定義的曖昧さを巡り、様々な批判がなされた(例えば竹友、1988 など)。

本論文では「甘え」理論の着想者である土居が「甘え」をどのように捉えていたのか、また「甘え」理論がどのような経緯で誕生したのかなどの「甘え」にまつわる基本的な情報をまとめ、整理・再検討することを目的としている。それにより、「甘え」概念の明確化を試みる。

II 「甘え」の定義について

1) 本論文における「甘え」

先に述べたように、本論文の目的は土居健郎によって

着想された「甘え」理論の曖昧な点を整理することにある。このようなテーマで論を進める際の手順として、課題となっている事象や問題意識、論点を整理することから始めるのが一般的であろう。本論文の場合、取り上げるのは土居の「甘え」理論であるため、土居の「甘え」の定義に立ち返り、議論を始めることは妥当と思え、著者らとしてもそのように進めていきたいところではある。しかし、本論文で取り上げるテーマではそれが難しい。この点に「甘え」理論の最大の課題がある。その課題とは、土居は「甘え」を厳密には定義していないため、共通の議論基盤を形成することが困難であるということである。そこで本論文では、この点から整理していくこととする。

まず、本論文において扱う「甘え」とは何かについて記載しておく。「甘え」とは土居健郎によって着想され、研究・発展を遂げた彼が「甘え」と呼んだものを意味する。これを前提とし、論を進めていきたい。

2) 辞書的な意味としての「甘え」

そもそも「甘え」はどのような事象を意味する日本語なのであろうか。議論の大前提として、日本語としての「甘え」の意味を確認していくことから始めよう。ただし、土居は論文中で「生きた文章や実際の日常会話のなかで「甘え」の意味を探ろうとせず、ひたすら字引に挙げられている意味によって「甘え」を定義しよう」とすることに対し、強い不満を表明しており(土居、1988a)、もし土居が存命であればこのような行いを嫌うことは想像に難くない。しかし、土居が述べた「甘え」を理解するためには、「甘え」という言葉の意味の確認は避けて通ることはできない。本論文ではあえてこの点を最初の検

討点とする。

手元にある最新版の『広辞苑 第七版』で「甘え」という言葉を調べると「甘えること。またその気持」と記載されている。また、「甘える」には「①甘みがある。甘たくなる。②恥ずかしく思う。きまりわるがる。てれる。③かわいがられたり親切にされたりすることを期待して、人なつこく振る舞う。また、わがままな振舞いをする。④人の親切・好意を遠慮なく受け入れる。」とある(新村, 2018)。つまり2018年時点で「甘え」は上述の意味で用いられていたと言えるだろう。しかし、言葉は時代とともに変化することは周知の事実であり、本来の意味から別の意味が派生することもある。土居は1920年に生まれ、『「甘え」の構造』(以下、『構造』と略記)は1971年に出版されている。そのため、土居のいう「甘え」が、現代と同じ意味で用いられていたと断言することはできない。この点を検討するため、土居が生きた時代に出版された辞書の「甘え」の項目を確認していこう。

『広辞苑 第二版』は、『構造』が出版される約2年前の1969年に出版されている。この版の「甘え」に関する記載を確認することで、『構造』出版頃の日本で「甘え」という言葉がどのような意味で使用されていたかが理解できるはずである。第二版で「甘え」を引いてみると、そもそも「甘え」という見出し語は存在しないことがわかる。第七版にあった「甘える」は存在するが、「あまゆ」という見出し語への移動が促され、「甘える」には一切意味の記載が見られない。「あまゆ」を引くと「①甘みがある。甘えたくなる。②恥ずかしく思う。きまりわるがる。てれる。③馴れ親しんでこびる。馴れ親しんでいい気になる。」という記載が確認できる(新村, 1969)。1983年に出版された『広辞苑 第三版』も確認してみると、「甘え」という見出し語が存在しない点は変わらないが、「甘える」には第二版で「あまゆ」の項に書かれていた内容が記載されている(新村, 1983)。「甘え」が見出し語として採用されたのは、1991年に出版された『広辞苑 第四版』からである。そこには第七版と同じ内容が記載されている(新村, 1991)。

念のため、他の辞書も確認してみよう。『新編 大言海』の出版は1982年であるが、1930年代に刊行された『言海』が元になっている辞書であり、その当時の表現を知ることができる。『新編 大言海』でも「甘える」という見出し語は存在するが、やはり「甘え」は見つからない。「甘える」には「児童、幼女ノ、父母ノ愛ニ馴レテ、キママヲス。ソバエル。ホダエル。アマエタル」(大槻, 1982)と記載されている。このことから、土居の幼少期や青年期には子どもの親に対する気ままな行動を「甘える」と表現していたと言える。また、1972年から1976年に渡って刊行された日本最大級の辞典である『日本国語大辞典』では、「甘え」という見出し語が存在する。そこには「①甘えること。気ままなこと。現代では、多

く、下の者が上の者に甘えることをいう。②甘やかすこと。」という記載が確認できる。「甘える」は「①甘味がある。甘いかおりがする。②相手の理解ないし好意を予想したうえで、なれ親しんだ行為をする。③親しんで、なれなれしくふるまう。なれ親しんで甘ったれる。現代では多く、下の者が上の者に対してふるまう場合について」と説明されている(日本国語大辞典刊行会, 1972)。

これらの辞書の記載から次のようなことが言えるだろう。まず「甘える(あまゆ)」という言葉は1930年代には、子どもの親に対する行動を表す言葉だったということ。『日本国語大辞典』の④の「現代では」という記載から、1960~70年代までには意味変容が生じ、「甘える」主体が子どもだけでなく、大人にまで拡張されたことが伺える。つまり、1960~70年代頃から、現代の「甘える」という言葉の意味とほぼ同様の使用がなされていたと言える。

次に「甘え」についてである。『日本国語大辞典』には掲載されているものの、1960~70年代に出版された多くの辞書では見出し語として採用されていない。このことから、この時代に「甘え」という名詞は安定した意味で使用されていない、もしくは広く一般に使われていなかったのではないかと推測する。土居自身も、初期の「甘え」論文「「甘える」こと」(1956b)と「再び「甘える」について」(1957)では、「甘え」という名詞はタイトルを含め本文中でも使用していない。これらのことから、「甘え」という名詞が安定した意味で使用され始めたのは1960年代以降とすることができそうである。つまり、土居はそのような時代に「甘え」概念を着想し、理論化していったと言える。

以上、簡単ではあるが辞書における「甘え」と「甘える」という意味記載の変遷を検討した。これらの前提に立った上で、土居の言う「甘え」を理解するため、彼の著作や論文の記載の検討に入っていこう。

3) 『「甘え」の構造』での記載

土居は著作のなかで「甘え」という言葉の意味を厳密に定義していないことは先述した通りであるが、土居の代表作『構造』のなかにはいくつかの定義めいた記載や説明がある。土居はそれらの文章を「甘え」の定義とは認めていないが、それらを検討することで土居の考える「甘え」に近づけるのではないだろうか。ここからは土居が著作のなかで「甘え」について説明している文章をいくつか引用し、それらの比較と検討を行う。検討に際し、検討対象としている引用文を明確にするため、便宜的に文頭にアルファベットを付した。

まず検討対象とするのは「甘え」の定義として引用されることが多い一文である。

A: 「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の

事実を否定し、分離の痛みを止揚^{しやう}しようとする
ことであると定義することができるのである」(土居、
1971)。

この文章は『構造』の第3章「甘えの論理」のなか
の「甘えの心理的原型」に記載されている。文中の後
半に「止揚」という見慣れない言葉が出てくる。この言
葉を先ほどと同様、『構造』出版時期に近い『広辞苑 第
二版』で確認すると「揚棄」として記載があり、「弁証法
における重要概念。或るものをそのものとしては否定し
ながら、却って一層高次の段階においてこれを生かすこ
と」(新村、1969)とある。これはヘーゲル哲学の専門用
語であるため、『ヘーゲル辞典』でも確認すると「止揚
(Aufheben)」とは、「廃棄する」と同時に「保存する」こ
とである。それは、ヘーゲル哲学にとって、「最も重要な
概念のひとつであり、端的に至る所で繰り返される根本
規定である」(高山、2014)とされ、『哲学辞典』におい
てもほぼ同様の説明とともに「この語は対立の統一とい
うときにもちいられる。すなわち、分裂した諸要素がた
がいに対立し闘争し、内的に浸透しあい、その過程を通
して統一され、高度に発展した事態が成立するとき、諸
要素が統一のなかに止揚されたといわれる」(林、1971)
と記載されている。精神科医である土居が、なぜ哲学用
語を使用したのかという点については不明である。当時
の知識人のなかには、哲学用語を用いて文章を書く者も
いたことを考えれば、不思議なことではないのかもしれ
ない。

では、Aの文章の検討に移ろう。文中にある「甘えの
心理は」というところから、土居が「甘え」を心理的な
何かとして認識していることが理解できる。次に「人間
存在に本来つきものの分離の事実を否定し」とある。こ
れはどのような意味と考えればよいだろうか。この文章
を理解するために、土居の別の文章を引用する。

B:「すなわち甘えとは、乳児の精神がある程度発達し
て、母親が自分とは別の存在であることを知覚した
後に、その母親を求めることを指している言葉であ
る。いいかえれば、甘え始めるまでは、乳児の精神
生活はいわば胎児の延長で、母子未分化の状態にあ
ると考えなければならない。しかし精神の発達とと
もに次第に自分と母親が別々の存在であることを知
覚し、しかもその別の存在である母親が自分に欠く
べからざるものであると感じて母親に密着する
ことを求めることが甘えであるといえることのできる
のである」(土居、1971)。

Bの記載から、土居の言うAの「分離の事実を否定し」
とは、心理的に母親とは未分化な状態にあった乳児が、
自分と母親が別の存在であると知覚し、その事実を認め

ないということを意味していると言える。土居は未分化
な状態は生後6ヵ月頃まで続き、最も素朴な「甘え」が
見られる時期であると述べている(土居、1971)。

Aの文章の検討に戻ろう。土居は「分離の痛みを止揚
しようとする」と続ける。先述した「止揚」がここで登
場するが、これはどのような意味で使用されていると解
釈すればよいであろうか。「止揚」を先に述べたように
廃棄することと保存することと理解するとして、この場
合は何を廃棄し、何を保存するのか。また、対立の統一
の際に用いられるとするならば、何と何が対立してい
るのか。それらの点がこの文章だけでは明確に理解でき
ない。この「止揚」の意味を巡って、精神分析とアタッチ
メント理論の研究者である工藤晋平は興味深い指摘をし
ている。その指摘とは、土居は「止揚」という言葉を哲
学的な意味で用いているのではなく、単に分離の事実を
否認する、打ち消すという意味で使用しているのではな
いかというものである(工藤、2020)。

この点を検討するため、土居が「止揚」という言葉を
どのような経緯で用いることになったのかを確認してい
くことにしよう。そのため、更にいくつか別の文章を提
示する。

C:「甘える者は甘える相手と合一しようとしている。
しかしそれは実は不可能なのだ。(中略)なぜなら、
甘えのなかには初めから主客対立が前提されている
からだ」(土居、1963)

D:「心理的には次のように説明することができると思
う。甘えるのは主客分離という傷を癒そうとするの
だ」(土居、1963)

CとDはどちらも1963年に発表された「甘えの心理
と論理」に記載されている文章である。この論文で「止
揚」という言葉は用いられていない。しかし、記載内容
は先のAの文章と類似している。AもCとDも、甘え
る者=乳児は母親との分離を否定し、甘える相手=母親
と分離しているという事実と直面し、傷つくという点は
一致している。その後、Dでは「甘えるのは主客分離と
いう傷を癒そうとするのだ」と続く。文脈的にはこの「傷
を癒そうとする」という文章が、Aの「止揚しようとし
る」に該当すると言えるのではないだろうか。

次に1964年の論文を引用する。この1964年の論文で
土居は「止揚」という言葉を初めて用いる。

E:「ところで甘えという依存感情は精神分析的に考察
してどのように位置づけることができるでしょう
か。いうまでもなく甘えの原型は幼い子供の母親に
対する愛情希求であると考えられますが」(土居、
1964)

F:「甘えるという依存感情は、母子の間にかつて存在して今は失われた一種の一体感を幼児が恢復しようと求めることである、と解釈できるでしょう。それは自分が頼む相手から切り離されているという痛みを克服しようとするものであり、同時にまた分離の事実を否定しようとするということでもあると思われます」(土居、1964)

G:「さて甘えという依存感情は、上述したごとく、自他の対立感を止揚し、自他の一体感を求めるものがあります」(土居、1964)

Fでは「自分が頼む相手から切り離されているという痛みを克服しようとするもの」と記載されている。また、「一体感を幼児が恢復」という記載もある。これは先のDで言う「傷を癒そうとするのだ」に該当するようと思われる。文脈的にも内容的にも、これらの記載がAでいう「分離の痛みを止揚しようとする」に該当する記載と考えられる。更にGの文章に注目して欲しい。土居は「上述したごとく、自他の対立感を止揚し」と記載していることがわかる。「上述したごとく」ということは、G以前の文章に土居が考える「止揚」を意味する内容が記載されていると理解してよいことになるだろう。Gの前の文章はFであるため、先の指摘は妥当である可能性が高いと言えよう。

複雑になってきたのでまとめよう。著者らは次のように「止揚」という用語が変遷してきたと考える。『構造』でいう「止揚」は1963年の段階ではD「分離の痛みを癒す」と表現されていた。しかし、1964年になるとそれは「恢復」、「克服」、かつ「止揚」という表現に変化した。つまり、土居は「止揚」という言葉を「痛みを癒す」「一体感を幼児が恢復しようと求める」「克服」を合わせたような、少しでも発展した状態・心理を表現しようとしてあえて使用したのではないかと推測する。少なくとも、用語の変遷を見る限り、「止揚」という言葉に込めた意味はあるように思われる。また、「止揚」はドイツ語のAufhebenという日常的に使用される動詞でもあり、「①上げる、拾い上げる、②助け起こす、③補完する、取っておく、④廃棄する、廃止する、⑤解散する、終結させる、⑥相殺する、帳消しにする」(在間、2010)という意味がある。確かに「帳消しにする」などの意味はあるが、文脈を考慮すると、単に否認・打ち消しという意味で使用したとは考えにくい。しかし、土居が亡くなった今、その使用意図を確かめるすべはなく、いくら検討を重ねても推測の域を出ないことは間違いない。しかし筆者らは「止揚」という言葉に土居の考える「甘え」の本質が示されているように考える。

ここまでの検討をまとめる。土居は「甘え」を乳児が母親との分離や一体感が破壊されることを否認し、分離

によって生じた痛みを母親によって癒してもらおうとする精神活動のひとつと考えていたのではないだろうか、と著者らは考える。

さて、土居自身は先のAの文章を「甘え」の「定義らしい定義」と述べている。その一方、「大層抽象的で持って廻った言い方」で「しかしもしこれを以て「甘え」の十全な定義となし得るかと問われると、やはり躊躇を覚えるのである」(土居、1988a)と述べ、この文章をもって十分な「甘え」の説明・定義であるとは考えていなかったと言っている。また、土居は『「甘え」の構造』の中に「甘え」についての決定的な定義を求めるのは、「木に縁って魚を求める」如きものということになろう(土居、1988a)とも述べている。しかし、これまでの土居の文章を検討したことにより、彼が考える「甘え」の輪郭は浮かび上がってきたと言えるのではないだろうか。

4) 『「甘え」の構造』以外での記載

次に土居が残した『構造』以外の著作の中から「甘え」について述べている箇所をいくつか抜き出し、土居が「甘え」をどのように捉えていたのかを検討する。

H:「口唇期の発達を自我の見地からのべると、これを「受ける」こと「取る」ことの経験の習得として考えることができる。「受ける」ことが受身であることに対して、「取る」ことは積極的である。さてこの経験に伴う感情は〈甘える〉ということばで表現されるものであるが、これは先にのべた母子の間に確立された信頼と関係がある。」(土居、1956a)

I:「甘えというのは元来は幼児の母親に対する感情を指す。であれば、成人になっても、甘えたいという欲求があり、それが治療状況において現れるのは驚くにあたらない。それは精神分析でいう「転移」の典型である。」(Doi、1962/土居、2000)

J:「すなわち「甘え」はまず一義的には感情である。この感情は欲求的性格をもち、その根底に本能的なものが存在する。」(土居、1981)

K:「ここで「甘え」という言葉の意味内容を今一度復習しておこう。それは人間関係において接近を喜ぶ感情を示す」(土居、2001)

L:「アタッチ (attach) は先に述べたように「くっつく」ことでそれ自体では生命現象を示唆しない。大体「なつく」といえばすでにして気持ちが入っている。そして「甘え」はまさになつく際の感情であるということができる。」(土居、2001)

『構造』では「心理」と述べていた「甘え」を、H～Lの文では「感情」という言葉で表現している。土居が「心理」と「感情」をどのように区別して用いていたのかは明確ではないが、やはり何らかの精神活動と捉えていたことは間違いなさそうである。

Iの文章では「甘え」を「精神分析でいう「転移」の典型」と述べている。土居は転移について、別の文献で「被分析者の分析医に対する非現実的な感情関係を〈転移〉と呼んでいる」、「患者が分析医に対して抱く思考・感情は、すでに精神が退行しているのであるから、患者の幼児期の体験をそこに反映しているとみることができる。これがすなわち転移である」と述べており(土居,1956a)、このことから「甘え」を「感情」と捉えていると言っていると間違いないと言えよう。

この「感情」は、K「人間関係において接近を喜ぶ感情を示す」や先のBでは「母親を求めることを指している言葉」、「母親に密着することを求める」とあり、乳児が母親への接触を求める「行動」を生じさせる動機となっていると土居は考えている。特に、Lの説明がそれを如実に表している。土居は乳児が母親に「くっつく」という「行動」の背後に、「なつく」という「感情」があり、その「感情」こそが「甘え」であると述べている。「行動」そのものというよりも、「行動」とその背後にある「感情」が「甘え」であるという言い方が正確かもしれない。

また、HとIの文章では、口唇期という、時期に関する具体的な記載が見られる。先に引用したBでは「乳児」と述べられていたが、それは口唇期を想定していると考えてよいだろう。但し、Bのなかで土居は「乳児の精神がある程度発達して」と述べているので、誕生した瞬間から「甘え」の感情が生じるのではなく、ある程度の発達を経なければ生じないと考えていると言える。今までの議論と総合して考えれば、口唇期の乳児がその期間のどこかで母親との分離を知覚し、その時点で「甘え」の感情が生じるということであろう。

Hでは「母子の間に確立された信頼と関係がある」という母子の親密な二者関係が前提と考えることが窺える。2007年に増補普及版として出版された『構造』のために寄せられた「「甘え」今昔」のなかで土居は「「甘え」は本来特別に親しい二者関係を前提とする。それこそ相手あつての「甘え」である。例えば、親子関係、夫婦関係、師弟関係、親しい友人関係などがそれに相当する。このような二者関係の中で一方が他方に甘えるというわけである」(土居,2007)と述べ、母親だけでなく親密な二者関係も含まれることを強調している。

しかし、Jの文章では「甘え」が感情であると述べる点は変わらないものの、発達上の時期と二者関係に関する明確な記述は消え、「甘え」は「欲求的性格を持った「本能的なもの」という記載になっている。「本能」とはどのような意味であろうか。土居は精神科医であると同時に精

神分析家でもあった。おそらく、ここでいう「本能」とは精神分析的な意味での「本能」と思われる。精神分析的な意味での「本能」とは「生得的で、生物学的な起源をもち、心の中で内側から生じて来る動機となって、人びとを駆り立てる力、あるいはその心的表象」(妙木,2002)ということの意味している。つまり土居はJの文章において「甘え」が生得的、生物学的なものとし、それは個人のこころのなかで発生してくるものであると捉えていると読むことができる。HとIの文章では「甘え」は二者関係が前提と述べているが、一方Jでは個人の本能と述べていることになる。土居は本能と二者関係、つまり対象関係をどのように理解し、考えていたのだろうか。

この疑問を解決するヒントを与えてくれる文章が『精神分析と精神病理 第2版』(1970)にあるので確認しよう。まず土居は「本能衝動はその満足のために原則として外界の対象を必要とする」と述べ、本能衝動に対象関係を求める欲求があり、それは自我に本来的に備わっていると主張する。そして自我は「個体が誕生によって母体から切り離され、自ら外界と接触するようになることを契機として発達する」という。つまり、ここまでの議論を総合して言うと、乳児が母親との分離を自覚し、母親を求める欲求が生じるという。その母親への対象希求の根本は本能であると土居は考えているようである。そして乳児の対象関係は「一方的に母親に依存し、もっぱら母親から愛情を受けることを求める」ものになるという。このような自我から発する欲求を土居は「依存欲求」と呼び、これを示す日本語として「甘える」が適していると述べている(土居,1970)。これらのことから、土居は自我から「依存欲求」が生じ、その結果として対象を求めると考えているようである。

ここまでの議論で、土居が「甘え」を「感情」として捉えていたこと、また「依存欲求」という概念を用いて母親への対象希求の背後に本能があると想定していたことは理解できた。土居が「甘え」を着想し、理論を展開したのが1960～70年代の日本であったことを考えれば、土居の思考の中心はやはり本能論的なものであったと想定されるが、二者の関係性を重視するなど、明らかに対象関係論的な思考が見え隠れする。土居が「甘え」について言及する際、英国中間派のバrintを引用することがあることから明らかであろう。しかし、藤山(1997)が指摘するように、ウィニコットやフェアバーン、ピオンなど対象関係論の知見を土居は参照していないため、対象関係理論との繋がりを理解することは困難であると言えよう。

5) 英語論文での記載

土居はアメリカに三度の留学経験があり、英語でも論文を発表している。そのなかには「甘え」に関する論文

も存在する。工藤（2020）が指摘するように、土居は日本語で執筆した「甘え」に関する著作において、「甘え」そのものを厳密に定義していないが、英語で書かれた論文では異なっている。おそらく土居は海外の人たちにとって「甘え」が自明ではないと考えたのだろう。英語論文のなかには簡潔な記載がいくつか存在する。土居が1962年に執筆した論文を土居自身が翻訳したもの（土居、1962/2000）があるので、ここではそれを紹介する。

M：「「甘え」というのは「相手の好意に依存し、あてにする」ことを意味する「甘える」という自動詞の名詞形である」（Doi, 1962/土居、2000）

Mの文章で「相手の好意に依存し、あてにする」が括弧で括られているのは、この文章が1956年の論文「Japanese Language as an Expression of Japanese Psychology」からの引用だからである。工藤（2020）はこの1956年論文の当該部分を「相手の好意に依存し、つけこむこと」と、土居とは異なる訳をあてている。英語の意味を含め検討し、この訳語をあてているため、訳としては工藤が正しいのだろう。但し、それは土居が想定した意味や文脈と必ずしも一致しないのではないか。土居の晩年の著作『続「甘え」の構造』（以下、『続構造』）を見てみると、土居は「甘え」を次のように説明している。「「甘え」の最も簡単な定義として、人間関係において相手の好意をあてにして振舞うことであると言っておこう」（土居、2001）。この文章でも「あてにする」という言葉が出てくる。このことを踏まえると、土居は工藤が言うような「つけこむ」という意味ではなく、やはり「あてにする」という意味を想定していたと考えるのが妥当と思われる。Mの論文を翻訳出版したのが2000年。『続構造』が2001年の出版であるため、少なくとも2000年代の土居は「甘え」を上述のように捉えていたということができよう。過去の説明と比較すると、あまりにも簡潔な印象を受ける。しかし、Mには今まで述べられていない「依存」という言葉が挿入されており、「甘え」が依存的な側面を持ち、かつ相手をあてにする心性と土居は想定していたことが窺える。

6) 精神分析的な意味としての「甘え」

土居は精神科医であると同時に精神分析家でもあった。だからこそ、土居は「甘え」理論を「私にとって甘え概念が精神分析理論を理解する中心的概念となった」（土居、1971）と述べているのである。つまり、土居にとって『構造』やそこに記載された一連の「甘え」理論は、一般に考えられているような単なる日本人論、日本文化論ではない。土居からスーパーヴァイズを受けていた精神分析家の藤山直樹も、土居が「「甘え」概念を精神分析的概念として発想した」（藤山、1999）と、土居と同様の

ことを述べ、「甘え」が精神分析という知から生み出された概念であることを強調している。ここでは、その精神分析的な意味について検討していく。

まず、『精神分析事典』ではどのように書かれているかを確認してみよう。小此木啓吾によって編集された日本版の『精神分析事典』には「甘え」の項目があり、それは土居自身が執筆している（土居、2002）。そこで土居は「「甘え」研究の出発点」、「甘え」の視点」、「甘え」とフロイトの説」、「甘え」と乳幼児研究」という章立てをし、「甘え」に関する記述をしている。しかし、そもそも「甘え」がどのようなものかということについては記載していない。「甘え」理論の提唱者である土居が執筆しているにも関わらず、この事典を読んでもやはり「甘え」がどのようなものか、精神分析との繋がりを具体的に把握することはできない。

他の著作のなかで土居は「甘えの現象を精神分析的理論の中で位置づけようとする、どうしてもこれを本能的なもの現われと考えざるを得なくなる。実際フロイトのリビドー概念は甘え現象をも包摂する物であると理解して間違いではないであろう」（土居、1975）と述べ、先述のJのような記述をしている。その一方で、Iのように転移とも述べている。この辺りは、やはりどのように土居が考えていたのか解釈が難しいところである。ただ、発達論的にはプリミティブな心性に基づく感情と捉えていたことは間違いのないと言える。

III なぜ「甘え」を定義しなかったのか

先述したように土居は「甘え」を厳密に定義していない。この点は早くから批判の声が上がっていた。例えば、1967年に開催された日本精神分析学会第13回大会のシンポジウム「甘え理論（土居）をめぐって」においてもシンポジストから、定義の曖昧さに対して批判がなされた。ニューヨークで開業している精神分析家の竹友安彦も同様の批判をしている（竹友、1988）。土居はこれらの批判に対し、著作・論文のなかで応じている。ここでは土居の反論と主張が明確に述べられている「「甘え」理論再考——竹友安彦氏の批判に答える」（土居、1988a）を中心に、土居の主張を確認していくことにする。

まず土居は、「甘え」の定義が曖昧であるという批判に対して「至極もつともである」と同意し、曖昧な理由について「私はまず「甘え」を定義してから論を進めたのではないからだ」と説明している。そして、その理由について論文中では次のように述べている。

1) 日常語であるということ

ひとつ目は、「甘え」という言葉は日常語で意味は自明であり、それがどのような心理的事象を指しているかは疑い得ないからであるということ。例えば『続構造』で

は次のように説明している。「一九五七年、私が「甘え」概念を手にして悦に入ったのは、はじめて「甘え」の特別な意義が私にわかったと思ったからで、「甘え」という言葉の意味ならば自明のはずだと思っていた。そんなわけでその後「甘え」概念を用いていくつもの論文を書き、精神分析に関する本を二冊までも書きながら、「甘え」それ自体を説明しなければならないという風には感じていなかった」、「甘え」の意味については論者の間に食い違いがあるはずがないと思っていたほどである」（土居、2001）と述べている。これらのことから、土居には少なくとも「甘え」そのものを説明しようという考えは存在しなかったようだ。しかし、1989年の論文「「甘え」の自明性をめぐって」において、「甘え」のセマンティックスは日本人なら誰も自明なことであるといふこの間まで考えていたのである。しかしこれはどうやら自明ではなかったのだ」（土居、1989）とし、考えを改める発言をしている。

2) 多義的であるということ

ふたつ目に「甘え」という言葉は一義的な定義ができないことを挙げている。藤山（1997）はこの点を「多義性を基礎とした多産性」を土居が強調しているからであると述べる。前述のように「甘え」は日常語であり、誰もが様々な文脈で使用する言葉である。このことが、「甘え」理論を土居が属していた精神医学や精神分析の世界だけに留めず、臨床心理学や発達心理学、文化人類学、社会学などの様々な分野・文脈での研究を進展させる要因となった。これらの研究のひとつひとつが人間の本質を理解するために大きな貢献をしたことは疑い得ない。しかし、日常語を使用したことによって生じた「甘え」の意味や概念の曖昧さは、それぞれの議論の立脚点そのものを曖昧にした。だからこそ、同じ「甘え」という言葉を使用しているにもかかわらず、議論や対話に混乱をもたらすこととなった。その混乱は現在においても生じている。

3) 批判後の土居の見解

土居は上述のように「甘え」を定義しなかった理由を説明した。では、批判を受けた後、土居はどう反応したのだろうか。土居は定義の曖昧さに対する批判のいくつかには応じ、そのなかで上述のような反論をしているが、一方で次のようなことも述べている。「私は「甘え」が曖昧でも一向に困らないということである。すなわち色々な意味合いを含めかつその全体に通じるある何ものかをさすものとして「甘え」を一つの概念として使うことに何ら支障があるとは思わない」（土居、1988a）。少なくとも1988年の段階で土居はこのように考えていたようだ。そして「私としても「甘え」を定義することに原則的に反対なのではない。ただ定義から出発することには反対である」（土居、1988a）と、批判を受けても「甘え」を

明確に定義しない態度を貫いている。一方で「「甘え」の意味を単に自明として片付けることはできないことに私も漸く気付くようになった」と土居は述べていることも付け加えておく（土居、2001）。

IV 「甘え」の研究史

ここまでは、土居の「甘え」に関する記述と、定義の曖昧さの理由を概観してきた。ここからは、土居の「甘え」研究史を振り返り、「甘え」理論がどのように発展してきたのかを整理する。

1) 研究史

土居は1950年代から「甘え」に関する論文などを発表し始めている。「甘え」理論研究の第一人者である熊倉伸宏によれば、土居の著作に「甘え」という言葉が初めて登場するのは1953年の「不安神経症の分析例——対抗転移の問題」であるという（熊倉、1999）。この論文は、古澤平作を中心に運営されていた精神分析研究会の機関紙である『精神分析研究会会報』2巻2号に掲載されたものである。論文のなかで土居は患者の感情の現れを「甘える」、そして「すねる」という言葉で説明している。言葉に厳密な定義を与えていないが、熊倉（1999）も指摘しているようにこれらの言葉を括弧で括っていることから、何らかの意味を持ち、意識的に使用したと考えて良さそうである。しかし、その後約3年間、土居は論文中で「甘える」という用語を使用しなかった。古澤が「甘える」という言葉を使用することに否定的だったからというのがその理由である（熊倉、1984）。

次に「甘える」という言葉が登場するのは、1956年と1957年である。この年、『愛育心理』に「甘える」ことと「再び甘える」ことについて」というエッセイを発表する。土居はふたつのエッセイで初めて「甘える」ことをメインテーマとして扱う。土居は「甘える」ことを始めるにあたり、大佛次郎の『帰郷』の主人公の次の言葉を引用する。「肉親だからといって余計に甘えたり憎んだりする日本人の感情だな。あれがおれはいやだ。それだけは卒業したつもりだ。隣の他人とどう違うのか。」（大佛、1949）。海外で生活してきた主人公が抱く甘え、そして憎しみという親への感情をエディプスコンプレックス（エッセイ中では「エディプス複合」と記載されている）として捉えつつ、なぜ上述のような感慨を抱くのかを土居は解説し、甘えたり憎んだりすることからどのようにしたら卒業できるのか、「いま海外で暮らしている私個人の課題であるとともに、また日本の子どもを育てる任をもっておられる皆さまの課題でもある」（土居、1956b）と問題提起して筆を置く。続くエッセイではこの問題を更に扱っている。これらのエッセイからは、「甘える」感情は克服していくべきものというニュア

ンスを感じ取れる。

1958年に精神神経学雑誌で発表された「神経質の精神病理——特に「とらわれ」の精神力学について」は、土居が初めて「甘え」を精神分析的な概念として使用した論文である(土居, 1988b)。さらに1961年に出版された『精神療法と精神分析』では精神分析の本質面の解説で「甘え」概念が用いられ、1965年に出版された『精神分析と精神病理』では、「甘え」概念が精神分析の主要理論の解説に利用されている。そして、それまでに発表されていた「甘え」論文の集大成ともいえる、土居の代表的著作となった『構造』が1971年に出版される。この著作は専門家向けの学術書ではなく、あくまで一般向けに書かれたものであった。それ以降、「甘え」理論再考——竹友安彦の批判に答える——(1988年)や、土居が初めて国際精神分析学会で発表した「甘え」概念とその精神分析的意義」など、「甘え」理論に関する論文や著作を相次いで発表した。

しかし、これらの論文・エッセイを読んでも、土居が言う「甘え」がどのようなものか理解することはやはり難しい。それは、文中において「甘え」の定義づけがなされておらず、意味が曖昧なまま使用されていることによることは今まで述べた通りである。

2) 「甘え」への着目

日本人にとって「甘え」は日常的に存在している言葉であり、現象である。そのため、「甘え」それ自体の意味は自明なものとして、特に意識することなく誰もが日常会話のなかで使用している。このような日常語を、土居はなぜ理論の中心に据えたのだろうか。この点について、土居(1971)はいくつかの説明をしている。

先述したように、土居は三度に渡ってアメリカへ留学している。彼は自分自身の考え方とアメリカ人の考え方が異なること、そして「甘え」という日本語が他の国の言葉に翻訳できないことに気づいたこと、日本人と日本人以外の患者にセラピーを行った経験から日本人のパーソナリティと文化に興味を持ったと述べている。そして「甘え」という日本語を取り上げることで「欧米語では容易に明らかにならない新しい視点を提供できるという眼目があった」(土居, 2005)と言う。そして、「日本で日本人の患者を見る以上は、日本語で記載し、日本語で物考えるようにしよう」(土居, 1971)と決心したと語っている。これがひとつ目の着目理由である。

上記以外に、「甘え」という日常語を使用した理由として考えられることがある。藤山(2010)は「土居は、フロイトがTriebという日常語由来の概念を鍵概念として用いたように「甘え」という日常語を精神分析における理論の鍵概念とすることの意義に意識的であったようだ」と指摘する。藤山が指摘するように、精神分析の創始者であるフロイトもTriebだけでなく、IchやEsな

どを含めた主要概念に日常語を用いている。おそらく土居は日本語の日常語を用いることで、精神分析理論を日本に合うように読み直すことが可能と考えたのではないだろうか。熊倉(1984)も1950~60年代の土居の研究を「フロイトのメタサイコロジーの基本概念に、日本語を対応させて独自の理論構成に踏み切った」と指摘している。土居は「甘え」以外にも、「すまない」や「いけない」「すねる」などの日常語を用いている。これは日常的に使用されるドイツ語を用いたフロイトに倣っているという側面があるのかもしれない。

3) 留学によるカルチャーショック

土居は、「甘え」理論着想に至るまでの背景を、『構造』の最初の章に記載している。土居自身は「一般に文化的な衝撃(culture shock)と言われるものを体験したことに関係がある」(土居, 1971)と述べている。

彼は精神科医になる前は内科医であったが、土居のものを訪れる神経症的な患者の対応に苦慮している内に、次第に神経症に興味を持ち始め、遂には精神分析に興味を持ち始める(土居, 1988b)。それを契機に1950年、彼は精神分析のメッカであったアメリカのメニンガー精神医学校に留学する。その際、多くのカルチャーショックを体験し、その度に彼は考え方や感じ方がアメリカ人と異なることにぎこちなさを感じていたという。

1952年に帰国した彼は、留学中読んだベネディクトの『菊と刀』に影響を受け、日本人とアメリカ人の心理の違いに興味を持ち始めた。当時の日本の精神科医は、患者の要点をドイツ語で記載する習慣があり、アメリカの精神科医が母国語を用いてそれを記載しているのに、日本はそうではないというところに違和感を抱いていたという。ある日、当時の東京大学医学部精神医学教室の主任教授であった内村祐之に「甘える」という言葉はどれも日本語特有のものらしい」と述べたところ、「そうかね、君。子犬だって甘えるよ」と返ってきたという。これは土居にとってかなりインパクトのあるやりとりであったようである。そのやりとりから、人間、さらには動物までも含めて普遍的な現象を記述する「甘える」という言葉が、日本人心理の特性と深く関係していることを確信するに至ったと述べている。

4) スーパーヴィジョン(監督分析)、訓練分析(教育分析)での体験

1952年に帰国した後、土居は当時、日本で精神分析を実践していた唯一の精神科医である古澤平作からスーパーヴィジョンを受けている。土居は古澤が我が国における唯一の権威と考えていたため、何も疑うことがなかったが、次第に古澤の説くところに懐疑の念が兆し始めた。そして、古澤が行っているのが、本当の精神分析ではないのではないかと思わずにはいられなかったとい

う。土居は古澤と幾度となく議論したものの、埒が明か
ず、古澤と袂を別つことを決心せねばならなかったとい
う。

翌年、彼はアメリカのサンフランシスコ精神分析協会
に本当の精神分析を学びたいと留学することを決意し
た。しかし、そこでも彼は、挫折を体験することになる。
以下はそれに関する引用である。「私は精神分析を自家
薬籠中のものにすることが出来ると、かなりの自信を
もっていた。まあ、意気壮なものであったとわれながら
感心するが、しかし見方を変えれば、これはかなり一方
的独断的な思い込みで、その意味では危険な徴候であ
ったと思う。炯眼な私の分析医ノーマン・ライダー (Rider,
N.) 博士がそのことに気が付かないわけではない。博士は、
私のこのような精神分析に対する態度がほかの方面にも
発揮され、個人生活の上で少なからぬ無理を生じている
ことを見てとった。そして、予定を変更し、早く帰国す
るよう強く私に勧告したのである」(土居、1988b)。

以上見てきたように、彼は国内では古澤からスーパー
ヴィジョンを、国外ではライダーから訓練分析を受けた
が、どちらも決別という形で終わっている。これらの詳
細は明らかになっておらず、実際に何が起こったのかは
推測の域を出ない。熊倉は土居も参加したシンポジウム
の席で、古澤との理論的決裂が「甘え」理論を生んだこ
とを指摘し(熊倉、1999)、土居はその指摘への応答とし
て「熊倉の慧眼に脱帽するばかりである」(土居、1999)
とその指摘に同意している。この応答から古澤との決別
が「甘え」理論の誕生に影響しているのは間違いなさ
そうである。また、北山(2010)は「甘え」理論の成立に
関する熊倉とのパーソナルコミュニケーションのなかで
熊倉から次のような回答を得たという。「教育分析に頼
る自分の〈甘さ〉に気付いて、直接、フロイトと格闘す
ると覚悟した。そして、無意識に権威に頼る自分を発見
し、それを〈甘え〉としたのでしょ。教育分析には甘
えられないという気づきと傷つきが、〈甘え〉理論を生
んだと思います」(北山、2010)。このように、土居の研
究者は、古澤との決別や訓練分析の断念が「甘え」理
論誕生のきっかけと考えている。しかし、具体的に何が
どのように影響しているか、土居は何も語っていない
ため、不明なままである。

V まとめ

本論文では辞書的な「甘え」の意味を確認し、土居の
考える「甘え」について検討を行い、更に「甘え」理
論着想の背景と思われる土居の生活史を振り返った。それ
らの検討を重ねたことで土居が「甘え」をどのように捉
えていたのか、明確とまではいかないものの整理するこ
とができたと思う。しかし、本論文で検討対象とした
文章は、膨大にある土居の著作の一部でしかない。その

ため、検討対象論文を増やせば、更なる整理と明確化が
期待できる。また、土居の「甘え」に関する記載だけ
なく、土居の生活史、特にキリスト教との関係や訓練分
析での挫折については、「甘え」理論に大きな影響を及ぼ
していると考えられる。土居の「甘え」理論の意義を理
解するためには、今後、これらを含めた検討が必要にな
るだろう。

引用文献

- 土居健郎(1956a). 精神分析. 共立出版. (土居健郎(1988).
精神分析. 講談社.)
- 土居健郎(1956b). 「甘える」こと. 愛情心理, 75, 1-2. (土
居健郎(2000). 土居健郎著作集2 「甘え」理論の展開.
岩波書店.)
- 土居健郎(1957). 再び「甘える」について. 愛情心理, 94,
1-2. (土居健郎(2000). 土居健郎著作集2 「甘え」理
論の展開. 岩波書店.)
- Doi, T. (1962). Amae: A key concept for understanding
Japanese personality structure. Smith, R. J., Beardsley, R.
K. (Eds) *Japanese culture: Its development and characteris-
tics*. Chicago Aldine Publ, 132-139. 土居健郎(訳)(2000).
甘え—日本人のパーソナリティ構造を理解するための鍵概
念. 土居健郎著作集2 「甘え」理論の展開. 岩波書店,
pp.9-23.
- 土居健郎(1963). 甘えの心理と論理. 東京新聞, 7月26-27
日. (土居健郎(2000). 土居健郎著作集2 「甘え」理
論の展開. 岩波書店.)
- 土居健郎(1964). 精神分析療法と「西欧の人間」. 精神分析
研究, 10(5), 1-5.
- 土居健郎(1970) 精神分析と精神病理 第2版. 医学書院.
- 土居健郎(1971). 「甘え」の構造. 弘文堂.
- 土居健郎(1975). 『「甘え」の構造』補遺. 荻野恒一・相場均・
南博(編). 臨床社会心理学の基礎5. 誠信書房,
pp.203-218. (土居健郎(2000). 土居健郎著作集2 「甘え」
理論の展開. 岩波書店.)
- 土居健郎(1981). 「甘え」再考. 土居健郎. 「甘え」の構造
第二版. 弘文堂, pp.217-231. (土居健郎(2000). 土居
健郎著作集2 「甘え」理論の展開. 岩波書店.)
- 土居健郎(1988a). 「甘え」理論再考—竹友安彦氏の批判に答
える—. 思想, 77I, 99-118. (土居健郎(2000). 土居健
郎著作集2 「甘え」理論の展開. 岩波書店.)
- 土居健郎(1988b). 学術文庫版へのまえがき—精神分析と私.
土居健郎(著). 精神分析. 講談社, pp.3-9.
- 土居健郎(1989). 「甘え」の自明性をめぐって. 青年心理5
月号, 23-31. (土居健郎(2000). 土居健郎著作集2 「甘
え」理論の展開. 岩波書店.)
- 土居健郎(1999). 甘えと言葉—討論. 北山修(編). 日本語
臨床(3)「甘え」について考える. 星和書店, pp.129-136.
- 土居健郎(2002). 甘え. 小此木啓吾(編集責任)(2002). 精
神分析事典. 岩崎学術出版社, pp.9-10.
- 土居健郎(2005). 精神分析と文化の関連をめぐって. 精神
分析研究, 48, 85-93. (土居健郎(2009). 臨床精神医学の
方法. 岩崎学術出版社.)

- 土居健郎(2007). 「甘え」今昔. 土居健郎. 「甘え」の構造(増補普及版). 弘文堂, pp.1-10.
- 藤山直樹(1997). 「「自分」と「甘え」」再考. 北山修(編). 日本語臨床(2) 「自分」と「自分がない」. 星和書店, pp.19-35. (藤山直樹(2011). 精神分析という語り. 岩崎学術出版社.)
- 藤山直樹(1999). まえがき. 北山修(編). 「甘え」について考える. 星和書店, pp. iii-v.
- 藤山直樹(2010). 甘え理論と対象関係論的含蓄. 精神分析研究, 54(4). 345-352. (藤山直樹(2011). 精神分析という語り. 岩崎学術出版社.)
- 林達夫(編)(1971). 哲学事典. 平凡社.
- 工藤晋平(2020). 支援のための臨床的アタッチメント論—「安心感のケア」に向けて. ミネルヴァ書房.
- 熊倉伸宏(1984). 土居理論の発展史. 熊倉伸宏・伊東正裕(1984). 「甘え」理論の研究—精神分析的な精神病理学的方法論の問題. 星和書店, pp.1-71.
- 熊倉伸宏(1999). 甘えと欠如. 北山修(編). 日本語臨床(2) 「自分」と「自分がない」. 星和書店, pp.113-128.
- 妙木浩之(2002). 本能. 小此木啓吾(編集代表). 精神分析事典. 岩崎学術出版社, pp.448-449.
- 日本大辞典刊行会(編)(1972). 日本国語大辞典 第一巻. 小学館.
- 大槻文彦(1982). 新編 大言海. 富山房.
- 大佛次郎(1949). 帰郷. 苦楽社.
- 新村出(編)(1969). 広辞苑 第二版. 岩波書店.
- 新村出(編)(1983). 広辞苑 第三版. 岩波書店.
- 新村出(編)(1991). 広辞苑 第四版. 岩波書店.
- 新村出(編)(2018). 広辞苑 第七版. 岩波書店.
- 高山守(2014). 止揚(揚棄). 加藤尚武ら(編). 短縮版 ヘーゲル事典. 弘文堂, p.231.
- 竹友安彦(1988). メタ言語としての〈甘え〉. 思想, 768, 122-155.
- 在間進(編)(2010). アクセス独和辞典 第3版. 三修社.